えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第83号
平成27年
(2015)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集「常設展示室リニューアルへの歩み
—竹内館長に聞く—」……1～2
新年祝辞　江戸博竹内館長・友の会畠中会長 ……2
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪その11」……3
えど友広小路 ……4～5
会員からの投稿「阿須賀」ふたたび、「袋物博物館」／
えど友サークルだより／友の会めも
友の会セミナー「川越と平林寺」……6
友の会セミナー「小塚原の仕置場と地域へのまなざし」…7
見学会「川越市内見学と平林寺参拝」（バスツアー）……8
「えど東京一景」（1）—石濱神社— ……9
江戸博クリップ「お正月の恒例行事」……9
江戸名所図会を歩く⑰［慈眼山萬福寺から光明寺池］…10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

常設展示室リニューアルへの歩み

—竹内館長に聞く—

あけましておめでとうございます。3月28日のリニューアルオープンが待ち遠しい皆様を代表して、畠中友の会会長、下永事務局長、中村「えど友」編集長が、竹内誠館長にリニューアルのきっかけや実現までの苦労話などを伺ってきました。1月24日(土)開催の友の会セミナー「常設展示リニューアルの概要」では、より詳しいお話を新田学芸員からお聞きできると思いますので、ぜひご参加ください。

リニューアルへの道のり

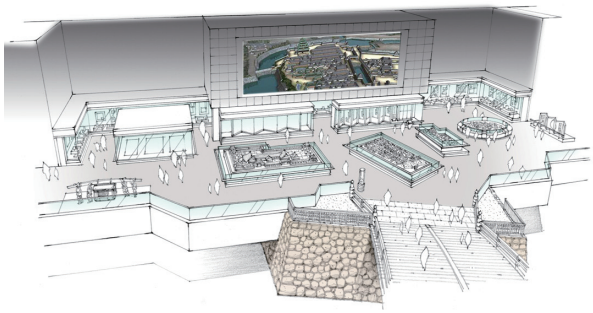
江戸博が開館してから10年目にはリニューアル検討委員会ができました。これが計画通りいっていれば開館15年目にはリニューアルしていた可能性がありました。当時は、各自が持つこうありたいという理想の姿を議論し合いました。例えば、江戸東京ひろばは建物の構造上、ビル風の影響を受けて強風がいつ吹くかわからず、実質的には使えていません。そこで、全体を透明な板で囲って3階の広場全体を使えるようにし、総合受付所、レストラン、図書室などを集約して本体の展示スペースを広げるという構想もありました。しかし、財政難等、諸般の事情により棚上げになりました。

今回改めて開館20周年を契機として、全職員によるリニューアル案を検討し、予算等とのバランスを考慮しながら実現することになりましたことを大変嬉しく思っています。今回のリニューアルの主な理由は、①は開館以来20年も経ちますと、展示物の中に劣化が進んだものが多く見受けられるようになったこと、②は学問は日進月歩、江戸や東京の研究も20年余経ちますと大いに進みました。その最新の研究成果を取入れる必要があること、③は開館時に予定した展示で実現できなかったもの、あるいはこの20年間の来館者のご要望をできるだけ展示に反映させる必要があることの3点です。

次にリニューアルの主な点を紹介します。

◆江戸城本丸の模型展示

6階展示室に入ると皆様に人気のある日本橋を渡った先に、江戸城本丸・二丸御殿の模型を展示します。どういう所が御殿で、将軍がどこにいたかなどが分かるようなものになります。江戸城の天守も、という要望もありますが、天守があった時代は大奥もまだ小さな建物で、全体的には壮大な建物という感じはありません。天守を作るのか、それとも明暦の大火以後の本丸になるのか、いつの時代の江戸城本丸の模型が展示されるか楽しみにしていてください。これが6階の目玉となりますが、武家関係の展示は、すべて6階展示室に集約させます。



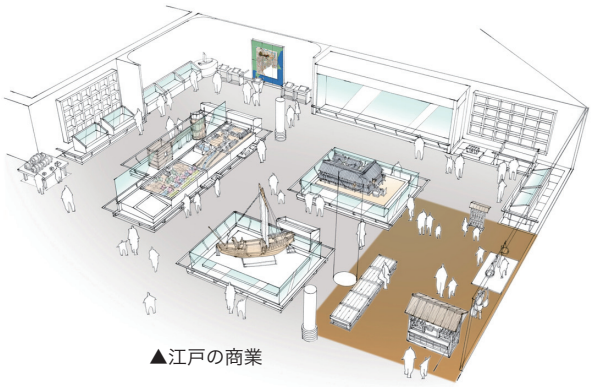
▲江戸城と町割り

◆長屋が増えます

「町の暮らし」コーナーを充実させます。すでに長屋が２室ありますが、もう３室追加して５室にします。更に長屋で共同使用していた井戸、トイレ、ごみ溜め、更にお稲荷さんも実物大で展示します。

◆体験コーナーを充実

今までも「体験しよう」ということで、纏（まとい）、千両箱、肥桶（こえおけ）を持ち上げる体験ができましたが、更に充実させたコーナーを作ります。作る体験もできるよう予定しています。椅子なども置いて休憩場所としても利用していただけます。



▲江戸の商業

◆江戸から東京へ
幕末維新の展示を追加

第２企画展示室の前、「江戸」の展示を見てから必ず通る動線にあたるところに幕末維新の資料を展示します。江戸城無血開城をテーマに、江戸から近代へ、主役は勝海舟です。関係する人々も時に応じて西郷隆盛、彰義隊、江戸城を守った和宮、篤姫などの資料を展示します。勝海舟の資料は、江戸博が最も多く所蔵しています。

◆近代の盛り場

両国と匹敵した盛り場であった浅草界隈の賑わいをミニチュアで再現します。これまで展示していた凌雲閣、電気館の両模型に人形や電飾を入れ、当時の賑やかさをより精密に再現します。

◆現代

今までの展示は、東京オリンピックで終わっています。今回はそれ以降の東京の歴史を社会風俗を中心にして1960年代、70年代、80年代、90年代、2000年代の東京の変遷をご覧いただきます。

◆ミュージアムラボ

今ある昭和の住宅は人気があり、外国人も好きで、靴を脱いで卓袱台（ちゃぶだい）の前に座るという体験をしています。ここでは住宅の体験だけでなく、「ミュージアムラボ」と称してワークショップもできるようにスペースを広げ、いろいろな体験をできるようにします。そして社会科見学で訪れる子供たちにも対応できるものを作ります。また、2020年東京オリンピックに向け、外国からのお客様に、より深く日本の生活文化を理解していただける場といたします。

◆展示説明パネルなどの改善

外国人の見学者が増加しているので、館内の案内サインをもっと分かりやすくします。また、展示品の大見出し、中見出し的な説明は、パネルとタブレット端末で、日本語、英語、中国語、韓国語で表示し、展示品についてもできるだけ解説を入れるなどの工夫もしていきます。

リニューアルはさらに続く

今回のリニューアルは、予定していたこと全てが実現しているわけではありません。学芸員から「朝野新聞社は明治９年(1876)に社屋を銀座煉瓦（れんが）街に置き、明治27年(1894)にその社屋を服部時計店に売却し、服部時計店によって時計塔(初代)が増築された。江戸博も開館から20年が経過しているので、それに合わせて朝野新聞社に時計塔を増築し服部時計店にしてはどうか」という提案がありました。展示物も時代とともに変化することを示すとてもよい提案であり、実現の方向で計画しましたが、いろいろな理由により実現できていません。他にもやり残したことがまだあります。まだリニューアルの計画は続いています。それを一歩一歩実現させていくのが私の夢です。開館当初に初代児玉幸多館長が掲げた当館のモットーは「日々生々発展する博物館」。今も変わりはありません。

【記録】文：広報部会・前田太門
写真・イラスト：江戸東京博物館提供

新 年 祝 辞

江戸東京博物館　館長　**竹内　誠**

友の会の皆さん、おめでとうございます。

22周年を迎える江戸東京博物館の今年は、画期的な年になります。その一つは、3月28日に常設展示室がリニューアル・オープンすることです。まさに江戸博が第１ステージから第２ステージへと飛躍する年になります。

もう一つは、今年の秋に北京首都博物館、ソウル市歴史博物館、瀋陽故宮博物院の３館の館長および学芸員を江戸博にお招きして、日中韓博物館国際シンポジウムを開催することです。

国際交流の基礎は、こうした文化交流にあります。外国からの来館者が年々増加している江戸博にとって、この催しはきわめて重要だと思います。本年もよろしくお願い致します。

年頭にあたり、友の会の一層のご発展をお祈り申し上げます。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**畠中　勇**

明けましておめでとうございます。

友の会では、今年も人気の高い古文書講座、セミナー、江戸の名所を巡る見学会など多彩な事業を実施してまいります。また、今年が友の会発足15年にあたりますので、これにちなんだ事業も実施したいと考えています。まだ具体的な案は決まっていませんが、今後、会員の皆様のご要望をいただきながら事業を進めていきたいと思います。

会員数は、昨年末で1700人を超えていますが、江戸博の常設展休止中は会員の新規加入が減り、会員数の減少が心配されます。現状維持を図るため現会員の方には引き続き会員を継続されるようお願いします。今期の役員任期もあと半年を切りました。残された任期を役員一同一生懸命頑張ります。皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成26年11月9日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪―その11（白金・目黒周辺）―

今回は白金・目黒周辺で描かれた６枚の絵の場所を訪ねます。当日配布された資料の目黒白金図（嘉永７年版）を見ると大名家の下屋敷等と百姓地が多い場所です。秋の日差しの中、広重推奨の江戸名所を歩きました。

立行寺から目黒方面へ

集合場所白金高輪駅前を出発し、２、３分で立行寺（りゅうぎょうじ）に着きます。このお寺は、徳川家康、秀忠、家光三代に仕えた大久保忠教（ただたか）、通称彦左衛門が創建したもので、寺内には大久保家一族の屋根つきの立派なお墓がありました。

▲大久保彦左衛門の墓

寺の門を出て商店街・住宅街を抜けると、古川に架かる四の橋（相模殿橋）に出ます。橋を渡り、道を振り返ると**「広尾ふる川」（22景）**となります。絵中左の鰻屋は、「江都自慢」等の番付に「古川狐うなぎ」と載っており、この辺は江戸市民に知られた名所であったようです。

橋を戻り、三光坂を登ると、右側奥に松平十郎麿下屋敷跡（聖心女子学院）、両側には上杉家、毛利家、京極家の下屋敷跡などがあり、閑静なお屋敷やマンションが並んでいます。

目黒通りへ出て間もなく左に渡ると八芳園があります。その道沿いにある瑞聖寺（ずいしょうじ）、松平讃岐守邸跡（国立自然教育園）を通り、JR目黒駅方面へと歩きます。

▲瑞聖寺大雄宝殿

行人坂から恵比寿方面へ

目黒駅を越して左手の急な坂、行人坂を下ります。当時行人坂は目黒不動への参詣道で、近くの夕日の岡は紅葉の名所で道筋に茶屋、料理屋、土産物屋が立ち並び、賑やかだったそうです。

坂を下ると左手にある大円寺は、明和９年（1772）の江戸大火の火元になった寺で、火事の犠牲者追悼のために造られたとされる五百羅漢像（都指定有形文化財）、旧太鼓橋の石材などがありました。

▲大円寺五百羅漢

並びにある細川越中守邸跡（目黒雅叙園）を過ぎて、目黒川に架かる橋があります。これが現在の太鼓橋です。**「目黒太鼓橋夕日の岡」（111景）**は、川下を望んで静かな日の雪景色を描いています。橋を渡って皆で高層ビル群を見ながら絵と見比べました。

目黒新橋を渡り権之助坂を左に回って恵比寿駅方面、荏原台地下を歩きます。右手高台にたくさんのマンションが建っています。**「目黒千代が池」（23景）**では台地から湧き出た水が何段にも折れる滝となり千代が池に流れ落ちています。現在は滝や池はもちろん残っていませんが、高台を指さしてあの辺が段かしらと話しながら歩きました。その少し先、急坂曲がり角に茶屋坂石塔が、坂上に爺々が茶屋の説明板がありました。

「目黒爺々が茶屋」（84景）では右に富士、左に畑、手前に茶屋が描かれています。目黒川に沿って北側の傾斜地は将軍の鷹狩の際のお立ち場で、将軍家光は、この茶屋の主人を「爺々」と話しかけたので、そう呼ばれるようになったと伝わっています。急坂を登っても当然富士山は見えませんが、昔はよく見えただろうと想像できる傾斜道でした。

恵比寿付近から代官山へ

しばらく中目黒方面へ歩き、かつて**「目黒新富士」（24景）**があった場所へ出ます。目黒新富士は、文政２年（1819）近藤重蔵別宅敷地に築かれた人工の山ですが、現在はマンションが建って石碑が残されているだけです。この富士塚にまつわる事件で八丈島へと流された『八丈実記』で有名な近藤富蔵は、近藤重蔵の息子です。

すぐ近くの目切坂高台は、**「目黒元不二」（25景）**があった場所です。これは、文化９年（1812）に近くの村の富士講の信者たちが築いたものといわれています。この山の後、南西に新富士が築かれたので元不二というようになりました。現在はマンションが建っており、すぐ脇の崖下には東横線の電車が走っています。どちらの富士塚も遠くに富士山を眺め、登山者で賑わったらしく、２枚の絵には人工富士を訪れる人々も描かれています。

元不二があった場所から５、６分歩くと、解散場所である代官山駅前に出ました。上り坂が少なめの歩きやすいコース設定で大変感謝です。楽しい３時間の歴史散歩でした。　参加者　134人。

▲目黒元不二のあった辺り

【取材】文：広報部会・竹中祐見子
写真：同・菊池真一

会員からの投稿

「阿須賀」ふたたび

松　原　明　子

『えど友』第81号4ページの髙澤金吾さんの「王子権現のルーツを尋ねて」を読んで、私は思わず「あら!」と声を上げてしまいました。

実は王子権現のルーツとされる阿須賀神社のある新宮市は私のふるさとなのです。東京・王子の髙澤さんがあんなところまで行ってくれたのかと思うとうれしくなりました。

この阿須賀神社が王子や飛鳥山のルーツであることを私が知ったのは、こちらに来てから、それも「江戸博友の会」を通じてでした。あれはもう8、9年前のことですが、今も活動しているえど友サークル「落語と講談を楽しむ会」で王子散策へ行ったときのことでした。王子、飛鳥山はそれまでにも何回か行ったことがありましたが、さすが東京、こんなところもあるんだと思っていただけでした。ところが王子神社に着いたとき、リーダーの鈴木さんから由緒の説明があり、ルーツが和歌山県新宮市の阿須賀神社だと知りました。新宮市の地図まで添えての丁寧な説明に私は思わず「ここは私のふるさとです」と皆さんの前で叫んで(?)しまいました。皆さんにとっては「ああ、そうですか」というだけのことでしたが、私にとっては忘れられないことになりました。

新宮市の観光案内をみると、市内の神社としてはまず熊野速玉神社が大きく取り上げられ、次いで神倉神社、そして最後にちょこっと阿須賀神社が紹介されています。速玉神社は世界遺産・熊野三山の一つで、昔から観光名所でした。神倉神社は私の母校・県立新宮高校のとなりで、よく授業を抜け出して(サボって?)遊びに行っていたところです。今でも「お燈まつり」で有名です。というわけで阿須賀神社がやや小さく扱われているのは仕方ないかもしれません。

でも今から400年以上前までは、中辺路を通ってきた人たちは、本宮から新宮まで主に船で下り、熊野速玉神社にお参りしたあと、新宮の町中を通って、阿須賀神社から王子神社(浜王子)に詣で、王子ヶ浜を歩いて、三輪崎・佐野を通って那智山に向かっていたそうです。つまり、阿須賀神社は古くは熊野古道ルートにあったのです。

王子神社や王子ヶ浜は今でもあり、新宮市には王子町(1～3丁目)もあるのですが、髙澤さんは行かれたのでしょうか。それは別としても、阿須賀神社が東京の王子や飛鳥山のルーツであることをもっとPRしたらいいのにと思いました。有楽町の交通会館地下1階に「喜集館」(紀州のもじり)という和歌山県のアンテナショップがあり、私も時々行くので今度話してみようかと思っています。

―両国周辺散歩 小さな博物館―

「袋物博物館」

国　定　美津子

皮染めの妙味

職人というと男性の仕事という概念ですが、古来より織物や染物など身の回りのものを作るのは女性で、宮廷では女官、大奥では奥女中の仕事。もちろん、武家でも妻や娘の役割でした。若い頃、友人に織物・染物・袋物・和裁・革細工・陶芸・七宝焼・フラワー等の趣味を持つ人が多くいました。

そこで、皆に声をかけて「造形10人展」を開くことになりましたが、当の私は得意なものはまったくなく、通信教育の革工芸課程を終えたばかり。製作期間は短く、展示即売で出品数はかなり必要。早くできるもの・・・をと考え皮染の絵を額に入れることに。下絵を牛革に写し、綿のタンポンでぼかし染めをします。偶然画廊取材に来られた新聞記者に「皮染絵は珍しい」と言われ、某新聞に掲載されました。

“皮染め”というと、ロウケツ染や型染めが蝦蟇口に多く施されていましたが、今はホック、チャック、マジックテープが普及すると共に、蝦蟇口や絵染の財布は少なくなりました。丸みがあってソフトな感触が味わい深い蝦蟇口ですが、洋風バッグには合わないようです。このような和袋物の歴史を紹介し、江戸後期から平成迄の品々を展示しているのが、両国の「袋物博物館」です。

創業100年の袋小物専門店

「袋物博物館」は両国駅から南へ13分程にある「東屋袋物小物専門店」に併設されています。袋物専門店の創業は大正3年(1914)ですが、博物館は平成16年(2004)に袋小物を製造販売する「東屋」として開館し、墨田区の小さな博物館運動に参加して昨年で10年目です。

この博物館は珍しいことに、玄関からすぐ靴を脱いで2階に案内されました。ソファーの置かれた展示室に入ると、窓からは竪川の水面が眼下に見えて癒されます。江戸革小物のルーツ、煙草入から現代迄の変遷も丁寧に解説され、奥の販売室では、小物入れ・札入れ・バッグの他、初代社長の肖像や女系三代の写真が目を楽しませてくれます。

現館長木戸好子さんは前4代目社長をつとめ今年92歳になられます。案内して下さったご息女の副館長木戸一江さんのお話では、昨年に創業100周年を迎え、今年販売室を改装とのこと(平成26年取材時)。現5代目社長は木戸詔一氏で、娘さんが6代目を継がれるそうです。

周辺も興味津々

館前から北へ行くと右手に「春日野部屋」があり、更に北には鰻・スッポンの「明神下神田川支店」や、しし鍋の「ももんじや」そして「両国どぜう桔梗家」など珍しい店々が並びます。両国橋手前にある赤穂浪士他数々の高札や史跡も見どころです。

※袋物博物館の開館は月曜～金曜日、第2・第4土曜日。13時～16時。休館は日曜日、第1・第3土曜日。
〒130-0026 墨田区両国1-1-7
電話 03-3631-6353

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月21日(火)本年度を締めくくる総会を行った。代表世話人伊東敏男が、①本年度の活動内容の報告②会計報告③問題点、改善点の総括討議をした。その後田中文彬世話人の議事進行により来年度の代表世話人小山一成、世話人鈴木紘一を決定し、承認を得た。参加者19人。

11月29日(土)サークル会員山内啓巳さんが所属する楽笑会の深川江戸資料館での発表会を鑑賞した。旅籠屋伊八治さんの「辰巳の辻占」などを鑑賞、大トリ太尾亭狸久(山内)さんの「付き馬」で、その噺の世界へ引き込まれた。参加者11人。

◆藩史研究会

10月9日(木)国定美津子さんが「土浦藩」の発表を行った。中世以降の平家から源氏の支配へと代わり徳川幕府になり、5家が入れ替わったが1687年に土屋氏になり明治時代まで他家に代わることなく続いた。参加者17人。

11月14日(金) 宇井教雄さんが「伊予松山藩」の発表を行った。豊富な地図・写真・人物像を視覚に訴えた分り易い「伊予松山藩」と久松松平家の説明であった。参加者14人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

10月9日(木)参加者7人。10月24日(金)参加者10人。11月13日(木)参加者8人。11月28日(金)参加者9人。以上4日間で、八丈島の島役人長戸路家に伝わる御用留(明和〜寛政まで)のP18〜38を解読した。

◆江戸東京を巡る会

11月13日(木)小春日和の日、本郷から東大構内の色付いた銀杏並木を通り、旧岩崎邸庭園、国立近現代建築資料館、湯島天神の菊人形と巡った。参加者46人。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月16日(木)清水昌紘さんの担当で、輪読会の3巡目が始まる。武蔵国総社六所明神社(府中市の大國魂神社)の御旅所を起点に、周辺寺社や地名の由来が地図を中心に解説された。参加者22人。

11月20日(木)担当は高野裕子さん。府中本町から多摩川を越えた関戸までの道は陣街道と呼ばれた。いわゆる鎌倉街道の一部である。陣街道近辺の寺社および、府中の旧名等について地図や様々な資料を駆使して深く掘り下げた説明がなされた。参加者22人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

10月26日(日)『えど友』第45号10頁の「落語で江戸散歩④大山詣り」の一部をなぞって歩いた。田園都市線池尻大橋駅に集合、上目黒氷川神社で天保13年の銘のある大山道の道標を、三軒茶屋では寛延2年・文化9年再建の大山道の道標を見学。二子新地へ移動して現在の大山街道を数カ所見学しながら歩き、最後は「大山街道ふるさと館」を見学後解散した。参加者39人。

10月30日(木) 1回目と同じコースを巡った。参加者40人。

11月23日(日) 先月に続き「大山詣り」をなぞって大山へ行った。小田急線伊勢原駅に集合し、バスで大山ケーブルへ向った。この日は地元の人も初めてという空前の人出で、こま参道の食事処に着いたのが午後3時すぎ。すべての予定を断念してケーブルで阿夫利神社(下社)へ向かうが、着いたのが5時。暗闇のなか神社に参拝、ライトアップされた紅葉を楽しむが、帰りもすごい混雑で、伊勢原に戻ったのが9時すぎという“とんだ大山詣り”となった。参加者53人。

・82号の9月活動報告中、「誕生八幡神社で落語を聞き……」とありましたが、[誕生八幡神社で落語「目黒のさんま」等についての説明を聞き……] の誤りでした。訂正し、お詫び致します。　(編集部)

◆日本の大道芸伝承会

10月23日(木) 通常練習の後、深川江戸資料館イベントの反省会。参加者3人。11月12日(水) 通常練習。参加者3人。11月30日(日)通常練習の後、来年3月に決定した深川江戸資料館イベントの演目など検討した。参加者3人。

◆江戸を語る会

10月25日(土)発表者は若松謙二さん。子供の頃吉原近くに住んでおり、その経験などを「私が見た聞いた吉原遊廓」と題して語ってもらった。参加者13人。

●新サークル・メンバー募集●

◆「かっぽれの会」

江戸時代に下町で発祥した芸「かっぽれ」。江戸東京を踊りで表わすなら「かっぽれ」です。健康維持と「しゃれ芸」の習得に気軽にご参加ください。端唄で踊り、唄は2分前後の長さです。お稽古は生徒さんの体力・レベルに合わせて指導いたします。服装は浴衣で、股引、豆手ぬぐいなどが必要ですが、少しずつ揃えてください。(入会時は身体が楽に動かせる服装で参加してください。)入門開始の曲は「奴さん」からです。活動は月に2回で、第1第3水曜日の15〜17時、場所は江戸東京博物館学習室を予定しています。募集締め切りは2月末日で、活動は4月から開始します。なお、指導者(世話人)はかっぽれ歴50年、日本かっぽれ協会事務局長で芸名は鈴乃家梅奴です。　　世話人　鈴木正文

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成26年10月〜平成26年11月

◆役員会10月14日(火)15人。11月11日(火)14人。◆事業部会10月7日(火)26人。11月4日(火)27人。◆広報部会10月21日(火)12人。11月18日(火)10人。◆総務部会10月28日(火)20人。11月25日(火)19人。◆三部会交流会11月11日(火)43人。◆古文書講座　入門編：10月1日(水)午前81人・午後68人。11月14日(金)午前86人・午後53人。初級編：10月15日(水)午前65人・午後55人。11月16日(日)午前63人・午後47人。中級編：10月18日(土)午前43人・午後29人。11月15日(土)午前42人・午後26人。◆町方書上翻刻プロジェクト10月2日(木)A・Bとも休会。10月16日(木)A休会・B9人。11月6日(木)A7人・B9人。11月20日(木)A7人・B休会。

第146回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年10月11日）

川越と平林寺
～知恵伊豆と呼ばれた老中松平信綱が作った野火止新田～

講師　田中　潤さん（お茶の水女子大学非常勤講師）

今日は平林寺を中心にしながら川越との関連についてお話を進めていきます。松平信綱は川越と平林寺の結節点になる人物です。

臨済禅の専門道場・平林寺

平林寺は武蔵野の野火止台地にあるお寺で、正式には金鳳山平林禅寺といい、臨済宗妙心寺派の特例地です。山号の金鳳山は、鎌倉時代の終わり頃、平林寺を開いた石室善玖禅師が修行していた金陵(現在の南京)と、お師匠様が住んでいた山、鳳臺山から一文字ずつとってつけられました。寺号の平林寺は平たい林の中に見え隠れするお寺という意味です。

平林寺というお寺には二つの看板があります。一つは一般のお寺同様、檀家を持ちお寺を運営・維持する、もう一つはお坊さんを育成する大学という面です。これを禅宗では特殊な用語ですが、専門道場と呼んでいます。

臨済宗の起源は菩提達磨圓覺大師です。達磨さんは伝説上の人物とされていましたが、近年中国でその墓が発見され、今後さらに研究が進むと思われます。座禅を組み、自己の本性を見つめることを通じて悟りを開くことを宗旨とするのは臨済、曹洞、黄檗の禅宗に共通する重要なものですが、臨済禅の特色は公案と呼ばれる、いわゆる禅問答です。教授にあたる老大師と修行僧である雲水との間で１対１の問答(参禅)をすることによって、釈迦如来以来の教えが正しく次世代に伝わっていくかを確認しているのです。この問答の答えを得るために雲水は座禅を組むわけですが、さらに、臨済宗では特に作務と呼ばれる日常の労働を大事にしています。江戸中期の白隠禅師の言葉に「動中の工夫は静中に勝ること百千億倍す」とあります。日常の動作にこそ悟りの機会がある、静かに座禅を組むよりも、動いて考えることに価値があるという意味です。平林寺の13万５千坪にも及ぶ広大な境内は、作務を通じて悟りを開く契機を見いだそうとする空間として歴代住職が大事にし、今日まで護られています。境内は総門、山門、仏殿、本堂と寺院の中核をなす建物が一直線に並ぶ禅宗様の建築様式で整備され、周囲の林は国指定の天然記念物で、国木田独歩の『武蔵野』に引用されるように武蔵野の風情を残しています。

松平信綱公の事績

平林寺は南北朝時代、岩槻の大田氏によって岩槻に建てられました。しかし、秀吉軍の岩槻城攻めの際、兵火を受けて炎上し伽藍の大半を消失します。翌年鷹狩りに訪れた家康は、南北朝以来の平林寺の由緒を知り、家康の手習同輩であった鉄山宗鈍禅師を中興として迎え、復興させます。

信綱は、この中興された平林寺の檀那である大河内家に生まれましたが、大河内家は本来大名になれる家柄ではありませんでした。そこで６歳で自ら望んで叔父である松平正綱の長沢松平家に養子に入ります。後、３代将軍家光の小姓となってからは徐々に加増され、元和９年(1623)従五位下に叙され、伊豆守信綱となります。寛永４年(1627)には１万石の大名、９年老中、10年には若年寄、忍城城主となり、幕府の中で武家諸法度、参勤交代などの制度を整えるのに重要な役割を果たしていきます。信綱の業績の中で、最も重要なのは島原の乱、天草・島原一揆を平定したことでしょう。この功績によって信綱は川越城主となります。

川越というと時の鐘が有名ですが、中核となるのがこの川越城です。現在城郭の堀の復元を進めており、本丸御殿は近年修復が終わって、中に入れるようになりました。川越大師として知られる星野山喜多院は羅漢さんが有名ですが、これは江戸時代後期に川越を中心とした人々が寄進したもので、台石にその住所と名前が刻まれています。喜多院の「喜多」は元は「北」で、北院、中院、南院と三つで形成されていました。南院はなくなりましたが、中院は今も喜多院の南側にあります。天海はここを関東における天台宗の拠点にしようとしていたのですが、江戸御府内に作ることになったため、東叡山は川越ではなく上野になったのです。もう一つ大事な場所は仙波の東照宮です。川越が江戸の西の守りとして重要であったこと、さらには久能山東照宮から日光東照宮に家康の霊柩を移すとき一時留めたためにここに東照宮が建設されました。

野火止新田の開拓

川越城主となった信綱は、家の菩提所である平林寺を江戸と川越の中間である領地の野火止の地に移すことにします。これを諭したのが平林寺住職幽巌禅師でした。この地は水利が乏しいため、水のないところに仏様は移転を喜ばれないとたとえ話で信綱を諭します。そこで信綱は用水を多摩川水系から引くことによって水を確保し、野火止原野を潅漑し開拓することを決意します。信綱は玉川上水完成の功績によって1/3の分水を許可され、野火止用水を開削し、村々は野火止用水の流域に沿って作られていきました。承応２年(1653)には農家54軒が移住させられ、１軒に金２両、米１俵が貸し付けられたと一説では伝えられますが、実態は川越藩家中、旧小田原北条氏系統の武士の帰農等による官民共同出資で開発されました。野火止新田の開拓によってお寺の移転も可能になりましたが、信綱は志半ばで寛文２年(1662)に死去します。翌年、父の遺志を継いだ輝綱は岩槻平林寺の伽藍及び墓石に至るまで野火止に移させました。　　参加者：190人。

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子

第147回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年11月21日）

「小塚原の仕置場と地域へのまなざし」

講師　亀川泰照さん（荒川ふるさと文化館　上級主任学芸員）

江戸の仕置場

江戸の刑場は２カ所ありました。品川仕置場は鈴ヶ森に慶安４年(1651)にでき、浅草仕置場は小塚原に寛文７年(1667)に浅草聖天町より移ってきました。どちらも人がよく通る往還(東海道、日光道中)脇に設置され、獄門・火あぶり・磔(はりつけ)を人々に見せつけていました。

両仕置場には、仕置が行われるエリアのほかに非人小屋がありました。非人小屋は江戸中に720軒余が点在しており、仕置場ならではの存在ではありませんが、ここ仕置場においては、身分制社会の中で差別を受けた非人身分の人びとが、仕置場全般の雑役を担わされていました。小塚原にはそれに加えて回向院の下屋敷(以下、単に回向院)と御自分仕置(大名などが行う仕置)の場や腑分け・刀の稽古様(ためし)場所がありました。仕置場は、例えば『遊歴雑記』などに、現在流布している仕置場像と合致するような、荒涼とした風景が語られていますが、一方で、『北越雪譜』には「江戸に寒念仏とて寒行をする者道心者あり…毎夜鈴ヶ森・千住にいたり、刑死の回向をなす」など、回向・供養の場としても表現されています。

志士たちの埋葬

志士の墓がその例になります。安政６年(1859)、安政の大獄で死罪となった橋本左内や吉田松陰の場合、それぞれの藩士たちは小伝馬町の牢屋敷で遺体を貰い受けようと交渉するも、当初、法に触れるとして断られています。賄賂を使って交渉を成立させた後、今度は回向院と交渉して墓の敷地の確保と永代供養の契約をしました。彼らは自分たちで回向院へ遺体を移送し、湯灌や着替えをさせて埋葬しています。回向院の墓は、普通は木牌だけだったようですが、二人の墓はあまりに立派な墓石で、腑分けの立会に来た同心の目に入り、促されて当初より一回り小さい墓石が再建されました。文久２年(1862)の政変により恩赦となり罪が消滅すると、左内は福井の橋本家菩提寺善慶寺へ、松陰は世田谷区若林にあった毛利藩抱屋敷(現在の松陰神社)へと直ちに改葬されていきました。水戸藩士も同様に水戸へ改葬されています。彼らの遺体は、上部の木牌と同時に埋められた名前が書かれた石(レンガ大)により確定できたとされています。

幕末の腑分け

現在の南千住の回向院には、明和８年(1771)３月４日に杉田玄白らがこの場所で腑分け(解剖)を見学し、オランダの解剖図譜の翻訳を決意して『解体新書』の刊行を記念して建てられた観臓記念碑があります。玄白の時代、医者は解剖を見学するだけでしたが、幕末になると外科医術修行として、牢屋敷へ腑分けのための遺体２体を西洋医学所へ移送してほしいとの願書が出されます。腑分けには死罪となった遺体が用いられていました。その願書に対して牢屋敷は、将軍家の刀の試し切りの稽古に用いる遺体が不足するとともに、腑分けした人体の一部を見学者の一人が持ち出すという事件があったと反対します。刑死者の遺体の一部を供養のために手に入れようとする縁者があとを絶たないという問題が起こっていたようです。このことから、刑死者の遺体は、仕置場の外へ出してはならないルールがあったことがうかがえます。

無縁埋葬の場としての仕置場

つまり、刑死者は無縁として回向院が埋葬していました。もちろん、刑死者にも縁者がおり、町奉行所は死者を供養したいという縁者の心情を理解していました。そこで、表向き無縁を供養する寺院であるところの回向院が供養するという形をとりながら、実質、縁者は回向院を檀那寺のようにして墓を持ち、遺体を仕置場内から出さずに供養することで法との整合性を保っていました。その他、本来の意味での無縁である行倒れ人、人足寄場からの遺体も回向院が埋葬供養し、毎年７月に施餓鬼法要が行われました。寄場役所、南北両町奉行所から埋葬料(鍬代)、回向料が下され人足の手当てや維持費に充てられました。

明治以降、鈴ヶ森は国道の拡張でその痕跡の大半は消えていきました。小塚原は回向院に石造物などの痕跡をとどめ、志士埋葬の地として墓が再建されてお参りされるようになりました。地元では、首切地蔵(延命地蔵)で松陰の命日に由来するとされた毎月７の日に縁日が行われました。この縁日は今も形を変えて開かれています。

レポーターからひとこと

江戸時代の刑罰の重さに驚き、それを上回る回向、供養の心に触れました。

参加者102人。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成26年11月27日）

「川越市内見学と平林寺参拝」（バスツアー）

前日の風雨から快晴の小春日和となった11月27日(木)7時30分江戸博に集合、8時10分出発しました。和光市に入る頃、5、6合目から上の雪化粧した富士山がその勇姿を現しました。

東京オリンピックを模したという白い帽子と赤いブレザーを着用した川越のボランティアガイドの皆さんの出迎えを受け、「喜多院」からと「本丸御殿」からの２班に分かれて見学しました。川越大師・**喜多院**は平安時代の天長７年(830)、慈覚大師が無量寿寺として開き、家康の信任を得た天海僧正が住職のときに喜多院となり、その後火事の度に再建されてきたそうです。３代将軍家光の時には江戸城内・紅葉山から客殿、書院などを移築したため、「家光誕生の間」「春日局化粧の間」が今も残されています。「化粧の間」は天井が低く、取りはずし可能な階段が今もありますが、階上は隠し部屋になっているそうです。狩野探幽の襖絵や、仏間の等身大の天海僧正坐像も拝見できました。

▲五百羅漢

日本三大羅漢の一つである境内の**五百羅漢**は釈迦如来を中央に十大弟子・十二支・江戸期の職人・その他生活感あふれる羅漢などぎっしりと並び、全部で538体あるそうです。浅間山噴火等による天明の飢饉の犠牲者を弔うために文政の頃までに建立されたとのことです。廃仏毀釈後の修復跡も残っていますが、今は苔むしてあまり区別がつきません。喜多院に隣接して東京赤坂の日枝神社の本社がありました。

「日本100名城」の一つで全国からのお城ファンが訪れるという**川越城**は築城から560年近く経っており、江戸の守りの拠点の一つとして歴代城主21人のうち８人が大老や老中の要職を務めたとのことです。特に名高いのが松平伊豆守信綱です。

明治維新後の解体を免れた**本丸御殿**は「大広間」「使者の間」「詰所」などが残され、長い廊下・縁側を歩くと足の裏に優しく懐かしいぬくもりを感じました。役所、煙草工場、校舎などに使用された歴史があり、大きいボール跡が天井にいくつも付いていました。

▲本丸御殿入り口

太田道灌の築城の際、城内に取り残された三芳野神社に庶民がお参りすると帰りに厳重な荷物検査があり、それが童謡「とおりゃんせ」発祥になったとのことでした。

車中から江戸の面影を残す蔵造りの町並みを眺め、弁当の昼食をとりながら、新座市の**平林寺**に向かいました。総門から山門の間も前日の雨に洗われた紅葉が目に鮮やかでした。一般には非公開の本堂と書院、林泉境内を丁寧な説明のもと特別に拝観できました。

本堂奥の書院で高村光雲作・松平信綱の木像を間近に拝見しましたが、内裏雛大の坐像で、50畳の大広間の襖には伊豆守家の家紋が描かれていました。

書院に面した奥庭園・林泉境内に下りると芝生が柔らかく、石造の蛙・狸・河童がユーモラスに鎮座していました。心字池を手前に枯山水の造りで築山の岩を上り下りしましたが、ここも種々の紅葉が見事で手に触れられる近さで観賞でき、足元も紅葉の絨毯でした。

▲平林寺

書院横から修復中の仏殿前を通り、大河内松平家廟所に向かいましたが、道すがら島原の乱供養塔や野火止用水開削の功労者・安松金右衛門や川越藩家老・小畠助左衛門の墓にもお参りできました。廟所は手前が大多喜家、奥が松平信綱夫婦の墓もある伊豆守家、後方に右京大夫家と、三家歴代の約三千坪の墓域となっています。参道や墓前に幾十と居並ぶ石燈籠も壮観でした。

廟所を横に出て、もみじ山からくぬぎ林、松林を歩くと「**野火止塚**(九十九塚)」があり、見上げるほど大きく円墳のようで頂上に石碑が建てられていました。途中「業平塚」に立ち寄ってから「歴代塔所」を拝見、真新しい石燈籠も奉納されていました。広大な境内林の落葉散り敷く小道はまさに秋深い武蔵野そのものでした。

暮色が刻々変化していく中、三日月・富士山のシルエット・夜景・水面のゆらめきなど車窓の眺めも楽しみながらのスムーズな帰路でした。

いざ出発の際、施錠され江戸博構内を出られないというアクシデントから始まりましたが、予定通り帰着でき「とおりゃんせ」の“行きはよいよい、帰りはこわい”の逆の一日となりました。　　参加者125人。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤美代子

えど東京一景

(1) ―石濱神社―

浅草、吾妻橋の東側から墨堤通りを2kmほど北上すると、右からくる明治通りと交差する。そこを横断して左折、白鬚橋を渡り最初の信号を右折するとそこが石濱神社である。橋を歩いているときから、右前方に神社の一部は見えているので見落とすことはない。鳥居をくぐると思ったよりも奥行きがあり、すぐそばに隅田川があるのと全体が広々としているので、都心にある神社とは違った雰囲気である。小振りではあるが神明造りの社殿が美しい。

創建は奈良時代の聖武天皇のころというから8世紀中ごろと古い。ご祭神は天照大神(あまてらすおおみかみ)、豊受大神(とようけのおおかみ)などの他、昔はこの辺りまで浅草地域に含まれていたため(現在は南千住)、「浅草名所(などころ)七福神」の一つとして、寿老神像が祭られている。

歴史的にも興味深いことが多く、古くはこの辺りは古代東海道が通じていたという。遠く西日本からの道は大井川を渡って北上し、(そのころは無かった)江戸城付近から東進し、隅田川沿いを浅草方面に北上、この石浜辺りで隅田川を渡って市川市国府台(こうのだい)(下総国国府)に通じていた。また、石浜城が築かれ、南北朝時代には足利尊氏と新田氏との戦いの舞台となったが、その後時代が推移するうち、お城自体は歴史の舞台から消え去ったという。

江戸時代には、東に隅田川、西に富士山、北に筑波山を遠望できる風光明美で清浄な地域であったため、隅田河畔の名所として庶民の信仰の対象ともなり「東都名所隅田川八景」や『江戸名所図会』、『東都歳事記』などにもとりあげられている。

しばし境内にいるうちに、その江戸時代ここを行き来した人々の様子や賑やかな光景に思いをめぐらせていた。

〔所在地：荒川区南千住3－28－58、最寄り駅：東京メトロ日比谷線・JR常磐線南千住駅〕

【取材】文・イラスト：広報部会・福島信一

【参考文献：『古地図とめぐる東京歴史探訪』
荻窪圭著・ソフトバンク新書】

〔編集長から〕
今号から、「えど東京一景」と題して福島信一さんのイラストと、それにまつわる文章を広報部会員が順番に担当するコーナーが始まります。さまざまな視点からの「江戸東京」をお楽しみ下さい。掲載は随時となります。

江戸博クリップ

「お正月の恒例行事」

都市歴史研究室司書　小宮山　めぐみ（こみやま　めぐみ）

明けましておめでとうございます！そして、はじめまして。2013年4月から図書室に勤務しています。時が過ぎるのは早いもので、あっという間に2年が経とうとしています。まだまだ未熟者ですが、新たな年を迎えて、より一層精進していきます。今年もよろしくお願いいたします。

さて、お正月と言えば初詣やおせち料理、初売りの福袋など思いつくものはたくさんあります。数ある行事や節句の中でも特別なものですね。その中でも私が最初に思い出すのは箱根駅伝です。生中継されるようになったのは1987年(昭和62)からというので、私は物心ついたころからお正月には箱根駅伝を見ていました。炬燵でみかんを食べながら、箱根駅伝を観戦するのがお正月の恒例行事となっています。学生たちの真剣なまなざし、時に起こるハプニング、予想外の展開に毎年目が離せません。順位もさることながら、学生たちが懸命に走る姿は清々しく、アナウンサーが伝えるエピソードは涙を誘います。私にとって、箱根駅伝は涙なしに見ることはできません。最近では、“繰り上げスタート”というフレーズを聞くだけで涙が出てきます。

その感動の涙によって、大晦日から飲み続けたアルコールもスッキリ！相模湾の海の色も相まって爽やかな気分になれます。さらに、観戦に集中することで、「そろそろ結婚したほうがいいんじゃない？」という両親の小言も聞こえなくなります。また、応援することにより、ただ炬燵に入っているだけの寝正月の後ろめたさも解消され、私は何もしていないのに達成感を味わうことができます。

すごいぞ！　箱根駅伝！！

今年はどんなレースになるのでしょうか。いつか炬燵からではなく沿道で応援したいと思います。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…⑰

[慈眼山萬福寺から光明寺池]

萬福寺山門

ツワブキの花が目につくようになってきた11月はじめ、池上本門寺からの続きを歩きました。図会の順番では次は千束池ですが、ルートの都合上、馬込の萬福寺から始めることにしました。

慈眼山萬福寺から馬込八幡宮

都営浅草線馬込駅から慈眼山萬福寺を訪ねます。茅葺屋根、切り妻造りの四脚門が堂々とした古刹を感じさせる曹洞宗のお寺です。山門の手前には名馬「磨墨(するすみ)」の像がありました。馬込一帯は丘陵地で馬の放牧が盛んだったといわれ、お寺には中世からの遺品として鞍、鐙(あぶみ)、轡(くつわ)などの馬具が残されています。萬福寺は梶原平蔵景時建立と伝えられ、境内にはその説明板とお墓もあります。しかし、図会では霊牌の表にある法名に鎌倉時代には使われなかった「大居士」とあるため、後世造られたものではないかと疑問を呈しています。後北条の時代になって馬込の地を領していた小田原北条家の家臣梶原三河守や梶原助五郎と混同し、景時が有名なために寺僧らが誤って伝えたのではないかとしています。景時の肖像といわれる木像についても「寺僧ハ景時の像なりといえども是も又三河守の像なるべし」とあります。

萬福寺から少し戻って馬込八幡宮へ向かいます。馬込全域の総鎮守で、建久4年(1193)に頼朝の家臣である渡辺対馬守正久が京都石清水八幡宮の分霊を勧請し、翌年遷宮したといわれます。拝殿前にはちょっと愛らしい造形の狛犬がありました。慶応元年(1865)にこの辺りの人々によって寄進されたものらしく、台石には古い地名ごとに寄進者の名前も刻まれています。

中延八幡宮から千束池

来た道を第2京浜まで戻り、道なりに国道を横切ると中延方面への道が続いています。30分ほど歩くと東急大井町線の荏原町駅に突き当たり、踏切を渡ってすぐ左側に法連寺と旗岡八幡神社が見えます。図会では「中延邑に在す故に号とす」とあり、中延八幡宮としていますが、長元3年(1030)源頼信が平忠常追討のため陣を敷き、旗揚げしたこの地を旗岡あるいは旗の台と呼んだため、旗岡八幡宮が通称となったようです。創建ははっきりしませんが、頼信を祖先に持つ荏原郡の領主荏原左衛門尉義宗の家に伝わる八幡大菩薩の神像を安置したのがはじまりといわれます。かつて境内左手の絵馬殿に懸けられていた品川区指定有形文化財の大絵馬は社務所に保存されていて、お願いすると中に入って見ることができます。境内は早くも七五三で着飾った親子連れで賑わっていました。

▲千束池　袈裟掛松

戻ってまた踏切を渡り、商店街を通って東急池上線の旗の台駅まで歩きます。2つ目の洗足池駅で降り、駅前の中原街道にかかる歩道橋に上ると池が見渡せます。反時計回りで池を回ることにしました。少し行くと左側の竹林に日蓮聖人袈裟掛け松の由来を書いた看板があります。中に入ると小さな庵の境内に何代目かに当たる松の木がありました。千束池は日蓮聖人が身延から池上宋仲の屋敷に向かう途中、この池で足を洗ったという伝説から洗足池と呼ばれるようになりました。番外ですが、この先に勝海舟夫妻の墓所が海舟の別邸洗足軒跡にあり、墓の左手には西郷隆盛の留魂碑(りゅうこんひ)と祠があります。これらは海舟が隆盛の死を悼んで私費で木下川(きねがわ)薬師、浄光寺境内に建立したものですが、荒川改修工事で寺が移転したためここに移されました。池の北西側には千束八幡神社があり、ここには名馬「池月(いけづき)」の像が立っています。

鳳来寺峯の薬師から光明寺池

洗足池を一周し、また池上線に乗って久が原駅で下車。環八通りを越えて鳳来寺峯の薬師を目指します。このお寺は真言宗峯照山正善寺といいましたが、中興三世の順宥が三河国鳳来寺より勧請した薬師如来が峯の薬師として信仰を集めました。正善寺は大正11年(1922)に観蔵院と称するようになりました。境内には実のなる木が多く植えられ、クチナシやロウバイがたくさん実をつけていました。

観蔵院を右に出て、環八通りと多摩堤通りの間の細い道を南に15分ほど歩くと大金山光明寺に着きます。元は真言宗でしたが、寛喜年間(1229-1232)に浄土宗西山派の祖、善慧上人が再興して浄土宗に変わりました。鐘楼の前には図会で荒塚とある丘があり、頂上に立つ木の下には古い五輪塔や石像の残欠でしょうか、石の破片がまとめられているのが見えました。この丘は江戸遠江守の墓所ともいわれていましたが、平成の発掘で6世紀前半の古墳と判明しました。境内南側には「光明寺の南に添う。往古矢口の川筋なりしといえり」とあるように、古い多摩川の流路の名残とされている光明寺池があります。埋め立てでだいぶ小さくなったとはいえ今も池は残っています。しかし、多摩堤通り沿いに金属塀が巡らされ、一般公開されていません。かろうじて塀のわずかな隙間から水面をのぞき見ただけで終わりました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

江戸博休館中の「友の会」活動について

皆様すでにご承知のように、江戸博常設展示室は平成26年12月1日(月)から平成27年3月27日(金)まで休室、3月9日～3月27日は江戸博全館が休館となります。

古文書講座は、会議室が使えなくなるため26年度の第3期はお休みとなりますが、他の友の会の活動(セミナー、見学会、学習会など)は通常通り行われます。『えど友』誌上の催事案内や、ホームページでご確認の上お申し込みください。皆様の参加をお待ちしております。

催事案内

古文書講座

第3期(1～3月)の講座休止について

1～3月は江戸東京博物館のリニューアル工事にあたりますので、全ての古文書講座は休止となります。なお、27年度は例年通り5月から開講します。引き続き大勢のご参加をよろしくお願い致します。

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会セミナー

第149回「常設展示リニューアルの概要」

講師　新田　太郎さん(江戸東京博物館学芸員)

◆江戸東京博物館は、今年で開館22年を迎えます。この間、常設展示室では累計2220万人のお客様にお越しいただき、大量の実物資料や臨場感あふれる模型、わかり易いガイドボランティアの解説などに好評をいただいておりますが、一部の機器や設備に老朽化がみられ、展示本来の機能が十分に発揮できなくなってきております。そこで、常設展示の長所を更に発展させるため、開館以来の研究成果を採り入れ、学校教育や旅行者の需要に応え、バリアフリーに配慮した展示とするべく、展示室をリニューアルする運びとなりました。今回は、友の会の皆様に向け、いち早くその概要をご紹介します。

◆講師略歴：にった・たろう

平成7年より江戸東京博物館勤務。「近代版画に見る東京展」、「絵すごろく展」、「東京流行生活展」、「美しき日本展」などの企画を担当。平成20年より東京都歴史文化財団事務局に勤務。平成23年度より江戸東京博物館に戻り、現在は事業企画課展示事業係長。

- 開催日時：1月24日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：1月15日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：無料

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

第150回「町奉行所の与力・同心」

講師　滝口　正哉さん

(千代田区教育委員会文化財調査指導員)

◆江戸の人口は18世紀には100万人に達し、その約半数が町人と言われています。彼ら町人と江戸の町を管轄したのが南北2カ所の町奉行所で、大岡忠相や遠山景元など名奉行が登場したことは有名です。しかし、奉行の配下には与力・同心という御家人身分の役人がいて、南北合わせても300人に満たない彼らが江戸の町政を支えていた実態はあまり知られていません。今回は彼らが担っていた多彩な仕事内容についてご紹介いただきます。

◆講師略歴：たきぐち・まさや

早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修卒業。立正大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士(文学)。現在千代田区教育委員会文化財調査指導員、立正大学・成城大学非常勤講師。専門は近世都市史・文化史。著書に『千社札にみる江戸の社会』(同成社)、『江戸の社会と御免富』(岩田書院)

- 開催日時：2月28日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：2月16日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

見学会

「再訪　江戸城周辺の探訪―その5(外濠)」

◆このシリーズの最終回です。江戸城外濠は、江戸城外郭を東西約5.5km、南北約3.5kmの楕円形で囲み、いかなる敵をも寄せ付けない巨大な要塞です。この外濠は絶大な権力をもつ江戸幕府の天下普請により、江戸城総構え工事として完成させました。今回はその外濠跡に沿って、溜池～数寄屋橋門～常盤橋門までを散策します。現在はほとんど埋め立てられてしまいましたが、その周辺に残る遺跡、遺構を探訪し、江戸城外濠の壮大さと歴史をしのびます。所要時間は約3時間半、大手町呉服橋で解散となります。

(この見学会は、平成26年10月12日実施予定でしたが、台風のため延期になっていたものです)

- 開催日：3月8日(日)　12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ銀座線・南北線「溜池山王」駅
  7番出口(地上)　山王パークタワー前
- 申込締切：2月26日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆・大澤憲一(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第７回(平成 26 年度 第２回)
足立区立 郷土博物館を訪ねる

◆足立区立郷土博物館は昭和61年に開館し、平成21年リニューアルオープンしました。足立区は江戸東京の東郊にあたり埼玉県に接しています。利根川から幾筋も川が分流してできた平坦な湿地帯であったため、江戸時代から新田開発が進んだ地域です。
当館はそんな環境の中に建っています。素晴らしい庭園も隣接しているのでたまには都会の喧騒を離れゆったりと散策するのはどうでしょうか。ちょっと寒いかも…

- 開催日：2月18日(水)10時～12時
  (受付は10時～10時30分)
- 開催場所：足立区立郷土博物館
  (1時間30分程の学習会)
  ○学習会の主な内容　館の紹介・常設展示と特別展の見学
- 交通アクセス：JR 常磐線「亀有」駅下車(東京メトロ千代田線乗り入れ)亀有駅北口より東武バス④［八潮駅南口］行(所要時間約８分)「足立郷土博物館」下車　徒歩1分
- 申込締切：１月29日(木)必着
- 定員：60人　**(会員のみ)**

＊**定員を超えた場合は抽選**、ご希望に添えないこともあります。

- 参加費：500円

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

催事申し込みのはがきについて

消費税が上がる前の 50 円はがきで催事を申し込まれている事例がいくつかみられます。50 円はがきを使用されるときは２円切手を貼って出してください。
また、往復はがきを使用されている事例もあります。普通はがきで申し込んでください。

会員優待のお知らせ

●特別展　好評開催中！

「探検！体験！ 江戸東京」

会　期：12月２日(火)～３月８日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし１月12日、１月19日は開館)。
　　12月28日(日)～１月５日(月)は休館
会　員：無料(要会員証提示)
同伴者：一般240円、65歳以上120円、大・専門生190円
　　＊高校生、中学生は65歳以上と同じ。
　　＊未就学児童、小学生、都内在住・在学の中学生は無料。

●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

えど友ホームページを見てみよう！

友の会のホームページをご利用されていますか？
このホームページでは、

- 会報『えど友』が PDF ファイルの形式で１号から最新号まで読むことができます。
- ホームページに掲載する『えど友』PDF 版を78号から写真などをカラーにしました。
- 見学会や「江戸名所図会を歩く」については、『えど友』に掲載できなかった写真も多数載せています。地図も掲載していますので、自分で行ってみることができます。
- 「江戸東京情報」として、江戸東京に関係する展覧会・イベントの最新情報を掲載しています。
- 「江戸東京情報」のリンクから『江戸名所図会』の原本が見られます。

他にもたくさんの情報が掲載されています。何が見つかるか、えど友ホームページを探検してみませんか？
「えど友」で検索すると、すぐに出てきますよ！

お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記して下さい。お間違いないよう、お願いします。**

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号**(必須)**、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
　　江戸東京博物館「友の会事務局」

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第 83 号
平成 27 年１月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、田端道宏、光田憲雄、中山達雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910